2005. 3. 2

名古屋の歴史を感じる

「文化の道」を歩く

旧川上貞奴邸が復元されたニュースが、１月下旬に報道された。今回はその二葉御殿と、周辺の大正ロマンの漂う屋敷町、明治の先端産業ゾーンとして栄えた名古屋市東区を３月２日に歩きました。

文化のみち

名古屋の近代化の歩みを伝える、歴史的な遺産の宝庫ともいえる名古屋城から徳川園に至る地区一帯を『文化のみち』として育み、貴重な建築遺産の保存活用や、沿道景観と調和した道路整備などが進められている。
この地域は名古屋城の南に広がった商業地区に対して、東に延びた武家屋敷地区で、明治維新による武家の没落後は、時計やバイオリンがこの地で国産化され、豊田佐吉や大隈栄一が機械工業を興し、また輸出陶磁器の絵付けやガラス工業の中心地になりました。

今回歩いたコース
大曽根駅－－－徳川園. 徳川美術館. 蓬左文庫－－－建中寺---二葉御殿---伊藤家. 大森家住宅－－－主税町カトリック教会－－－春田文化集合住宅－－－豊田佐助邸－－－豊田利三郎邸－－－名古屋陶磁器会館－－－名古屋市政資料館

都会のオアシス『徳川園』

観仙楼

黒門

名古屋城東 3km にある徳川園は、御三家筆頭である尾張藩第二代藩主光友が、自らの隠居所として大曽根屋敷を造営したことを起源としています。当時は１３万坪の広さで庭園内の池には舟を浮かべたと言います。平成１３年から日本庭園として再整備が行われ、昨年完成したものです。
楠木などの大木も茂り、岩を配した流れや池が都会のなかに潤いをもたらす、オアシスとなっています。その入り口には明治３３年に完成した尾張徳川家の、邸宅の黒門が大空襲による焼失をまぬかれ、武家屋敷の面影を残しています。

徳川美術館

この美術館は男爵徳川義親の寄贈により、御三家筆頭６２万石の『大名道具』をそっくり収め、昭和１０年に開館したものです。
収蔵品は徳川家康の遺品を始め、初代義直以下代々の品や、その家族が実際に使ったものばかり一万数千点に及びます。なかでも世界的に有名な国宝『源氏物語絵巻』を初め国宝９件重要文化財は５５件、重要美術品４４件を含みます。私たちが入館したときには、ちょっと洒落たご婦人たちでごったがえしていました。丁度、尾張徳川家のひな祭りを展示中だったためと思われます。しかし、それにしても多くの人が来ているのに驚きました。
展示は第 9 展示室まであり、順に①武家のシンボル武具.刀剣②茶の湯③書院飾り④能⑤おく道具⑥源氏物語絵巻、以降は特別展示の徳川家のお雛さん

となっています。かなりのボリュウムがあり丁寧に見ていると一日かかってしまいそうです。

徳川美術館

内側からの黒門

　お雛さんは、中馬のお雛さんをみてきましたが、さすが徳川家のものは立派というばかりです。これだけ揃えられると唖然としてしまうほどです。館内はすべて撮影禁止のため写真が取れません、ちょっと残念です。
この徳川美術館に併設して蓬左(ほうさ)文庫がある。尾張藩初代藩主の徳川義直が、父家康の蔵書約３０００点を中心に創設した、尾張藩御文庫の蔵書を受け継ぐものである。こちらは誰も見学していなかった。

尾張徳川家の菩提寺『建中寺』

　尾張徳川家の菩提寺、浄土宗。二代藩主光友が慶安５年(1652)に創建した。総門、三門、御成門、本堂、鐘楼が市文化財。都市景観重要建築物となっている。
　さすがに徳川家の菩提寺、立派なものである。今は総門と三門の間を道路がはしっている程広いのだ。ちょうど鐘楼の隣に紅梅が咲き誇り、黒い建物に映えて絵になる風景がいい。
いたるところに三つ葉葵のご紋が目に付く。お参りしようとしたのだが、賽銭箱は出ていなかった。本堂の中にしか置いてないようだ。

三門から見た建中寺本堂

サロン二葉御殿

日本の女優第一号として名をはせた川上貞奴は、女優を引退した後大正９年ころから末まで、電力王と呼ばれた福沢桃介とここに暮らした。約２０００坪の敷地に建つ和洋折衷の建物は、その斬新さと豪華さから二葉御殿と呼ばれ、政財界人や文化人のサロンになっていたといいます。赤い瓦葺の屋根の、印象的な館が復元されたのだ。

川上貞奴

明治４年生まれ。１６歳で芸者となり、２３歳で川上音二郎と結婚。川上一座のアメリカ巡業で、女優として初めて舞台に立つ。
ヨーロッパにも渡り明治 33 年のパリ万博で、マダム貞奴の名は一躍有名になる。音二郎の死後、福沢桃介の事業パートナーして、また自らも実業家として二葉御殿で暮らした。

福沢桃介

明治元年生まれ。福沢諭吉の次女ふさの婿。電力事業に乗り出し、木曽川水系に大井発電所をはじめ７箇所の発電所を建設。電力王といわれた。
一階の大広間に入ると、立派ならせん階段が目に飛び込んでくる。周りにはステンドグラスがはめ込まれている。すばらしいの一言に尽きる。この建物

はわが国初の住宅専門会社『あめりか屋』が設計したものだという。ところどころに壁の断面とか、配線の様子が分かるように工夫されている。

モダンなサロン二葉御殿

ステンドグラス

らせん階段

　二葉御殿からかぶら木町筋へ向かう、ここには松坂屋を開いた伊藤家、大森家の住宅が並び、突き当たる国道４１号を右に曲がると、主税町カトリック教会がある。
二階三階建ての道路の脇に古の歴史を語る建物がひっそりと建っている。そして、今度は右に曲がると主税町筋で、ここには旧豊田佐助邸や春田文化集合住宅、陶磁器を輸出する貿易商として成功した春田鉄次郎邸が並んでいる。

タイル張りの洋館豊田佐助邸

豊田佐吉の弟佐助が建てたもので、白いタイル張りの二階建ての本館と、木造二階建ての和風座敷が併設されている。

旧豊田佐助邸

現在の所有者はアイシン精機で、市が借りて内部の改修も行われている。当時の新興住宅では主屋を和風とし、接客応接の間は洋風としたものが多い中で、三井、三菱などの大財閥の邸宅は洋館を主屋とした邸宅を構えていました。この豊田佐助邸も、新鋭実業家の心意気を示すものであったと思われます。

旧豊田利三郎邸の門

ほかには料亭のか茂免、香楽などがある。次に三本目の白壁町筋に入る。ここには豊田利三郎邸の門が残っている。この街並み保存地区の道路は、さすがに歩きやすく落ち着いた街となっている。その中に威風堂々とした門と

黒い塀が続いている。これが豊田利三郎邸の門である。しかし、上を見ると愕然とする、なんと高層のマンションが立ちはだかっているのだ。
そればかりか、隣には高速道路の三階建てが走っている。

左は高速道路が、後ろはマンション

都市の中ではこうしたこともやむを得ないことだ、それにしてもよく残しており立派なことだ。
順序が少しずれてしまいましたが、建中寺から二葉御殿へ行く前に名古屋陶磁器会館を見ました。それから１９号を超えて二葉御殿へ行き、街並み保存地区を回って最後に名古屋市市政資料館を見学しました。

名古屋絵付けの歴史

名古屋陶磁器会館

　明治１０年代に神戸、横浜の外国商館からの要望に応えて、瀬戸、美濃から仕入れた素地に上絵付けを施し、日用食器として輸出する。これが名古屋における陶磁器輸出.加工の完成業の始まりです。
明治２０年代後半、陶磁器業者は東区の武家屋敷跡を入手して工場を構

えました。陶磁器の隆盛とともに名古屋に集まった九谷、京都など全国の優秀な職人は伝統技法だけでなく、新たに先進国の技法も身に付け、製品に反映させていきました。
こうして多彩な技法で、市場ニーズに応え,近代産業としての『名古屋絵付け』を確立したのでした。ここでは一階のギャラリーが開放されており、いつでも見学することができます。そして絵付け教室も開かれており、自分だけの皿やカップなどを作ることもできます。

展示されている作品は、どれも色鮮やかなものでとてもきれいです。でも家庭で使うにはどうかな、ちょっとーーーーと思うような作品です。しかし、その鮮やかさには圧倒されてしまいました。

赤レンガの美しい

旧名古屋控訴院地方裁判所庁舎

名古屋市市政資料館

　この建物は全国８箇所に設置された、控訴院庁舎のうち現存する最古のもので、大正１１年当時の金額９０万円をかけて作られました。
建物はレンガ、及び鉄筋コンクリート三階建てで、正面中央にドームのかかった塔屋をあげたモダンな西洋風です。近代建築の変遷を知ることのできることから、昭和５９年に国の重要文化財に指定されています。

常設の展示として
　名古屋市の近代建築の草分け的な建物、今の松坂屋にあたるという呉服店、御園座、日本銀行名古屋支店などの模型。
名古屋市の今昔が分かる地図、名古屋の経済発展、名古屋のイベント,戦災と復興都市計画。明治憲法下の法廷と、現憲法下の法廷が人形を使って分かりやすく展示されている。
ほかには留置場も併設されている、独房と雑居房があり中へ入って見ると水道が一つあるだけだ。トイレはどのようにしたのかな?

さらに喫茶室も併設されている、こんなところでお客さんがくるのか心配になるが---。われわれもちょっと休憩しょうと立ち寄った。
コーヒーも紅茶もすべて２８０円だった。安いがコーヒーを飲みに行く場所が旧裁判所では、ちょっと雰囲気が気になります。
　このように名古屋市の発展ぶりと司法制度を、目で見て分かるように展示されているのだ。さすが名古屋市だけのことはある、こうした施設を多くの人が利用するように、PR も工夫してほしいと思った。

　今回の散策もいろいろなことを学ぶことができ、楽しく有意義であった。